

# 戦争文学としての『武器よさらば』

## についての一考察

三 留 修

文明が進んでも人間は戦争をやめようとはしない。有史以来現代まで、世界のどこかでいつも戦闘が行われている。人命第一をうたいながら、多くの国々で政府容認で武器を作り、人殺しをより効率よくしようと研究されている。文学の世界でも戦争を題材とした作品が次々と書かれる。アーネスト・ヘミングウェイの『武器よさらば』も戦争文学の作表的な作品である。周知のように『武器よさらば』は戦争と恋愛が描かれている。ここでは戦争が作品のなかで果たしている役割に重点をおいて述べてみたい。作品全体のバランスの良さで高い評価を得ているのは当然のことであるが、戦争小説の代表作ともいえる『武器よさらば』について論じてみたい。

### (1)

『武器よさらば』は、第一次世界大戦におけるイタリア戦線を背景に、戦場での恋愛を描いた作品である。構成、文体、象徴などについても見事な作品に仕上げられていると評価も高く、ヘミングウェイの代表作のひとつにあげられている。

第1部は、季節は冬で、物語のはじまりで、戦場で主人公のフレデリック・ヘンリーとキャサリン・パークレイが知り合い、2人はたがいに好意をもつ。フレデリックはアメリカ人で、イタリア戦線で傷病兵運搬車を指揮している。キャサリンはイギリス人で、野戦病院の看護婦である。第1章から第12章までが第1部で、夏の終わりから冬までの期間が描かれている。

第2部は第13章から第24章までで、季節は夏である。負傷したフレデリックがミラノの病院で手術をうける。キャサリンとの恋が真剣なものになる。

第3部は第25章から第32章までで、季節は秋である。この作品のクライマックスでカポレットでのイタリア軍の総退却、フレデリックの脱走が描かれている。

第4部は第33章から第37章までで、季節は第3部と同じ秋である。逃亡したフレデリックが落ち合ったキャサリンとスイスへ渡る。

第5部は第38章から第41章までで、季節は冬である。2人はスイスで平和な生活を送るが、キャサリンはお産の時に母子とも死ぬ。

構成はこのようにはじまり、発展、クライマックス、突然の結末となっており、冬、夏、秋、冬と一巡する。また、フレデリックとキャサリンの恋は「生理的なワナ」にすぎない。象徴についても、使い古された「雨」が不幸を表わす背景として描かれる。その反対の幸せや喜びを「太陽」として表わしている。

文体についても、ハード・ボイルド・スタイルで、感情を表わさずに客観的に外面的な行動のみを、スピーディに描いている、ということはくり返し言われている<sup>1)</sup>。

このようなすぐれた点があるために、『武器よさらば』は名作となっているわけだが、かなりの偶然な出会いを使いすぎている。フレデリックが負傷して手術をするために、ミラノのアメリカ軍の病院に運ばれる。するとキャサリンもその病院に配属になる。カボレットの総退却の後、ドイツ軍のスパイにまちがわれそうになったフレデリックは、タリアメント川に飛びこみ逃げきって戦路にたどりつく、と、ゆっくり走る貨物列車が来る。それに飛び乗ってミラノまでたどり着き酒場に入る。酒場から出て病院に行き、門衛にきくとキャサリンは数日まえに国境の町ストレーザに行ったということである。そこでフレデリックはストレーザに行き大きなホテルにとまる。そこのボーイにキャサリンの居場所を探してもらうと、彼女は同僚のファーガスンと小さなホテルにとまっていた。2人はまた再会というか、無事にめぐり会える。

フレデリックとキャサリンの離れたり、会えたりすることだけでも、戦場という特種な環境のなかでは話ができすぎている。偶然のめぐり合わせは、ヘミングウェイの長編小説のなかでは常にみられる描写である。計算しつくされた作品構成ということが、ヘミングウェイの作品に対するいつものほめことばになっているが、長編のなかではあまりにも偶然が多すぎる。

フレデリックの気持もゆれている。うまく逃れて、ストレーザ行きの列車のなかで彼は、

新聞を持っていたが、戦争についての記事は読みたくなかったので読まなかった。戦争のことを忘れるつもりだった。ぼくは単独講和をしたのだ。ひどくさびしかったので、列車がストレーザに着いたときはうれしかった。(I had the paper but I did not read it because I did not want to read about the war. I was going to forget the war. I had a separate peace. I felt dammed lonely and was glad when the train got to Stresa.)<sup>2)</sup>

と戦争のことを忘れようとする。そして、ストレーザのホテルのバーに落ち着き、バーテンダーの質問に、「戦争のことは言わないでくれ」<sup>3)</sup>と言ってフレデリックは次のように考える。

戦争はずっと遠くへ去っていた。戦争はなかったのかもしれない。ここでは戦争はなかったのだ。そのとき、ぼくにとっては戦争は終わっていると気づいた。しかし、ほんとうに終わっているのだという感じはなかった。ずる休みをした学校で、その時間に何をしているだろうかと考えている少年の気持だった。(The war was a long way away. Maybe there wasn't any war. There was no war here. Then I realized it was over for me. But I did

not have the feeling that it was really over. I had the feeling of a boy who thinks of what is happening at a certain hour at the schoolhouse from which he has played truant.)<sup>4)</sup>

フレデリックは戦争のことを忘れたかに思うが、キャサリンとスイスへ逃げ出す話をしているうちに、

「ぼくは罪人みたいな気がする。ぼくは軍隊を脱走したんだ」

「おねがいたから落ちついて。軍隊から脱走したんじゃないわ。ただのイタリア軍なんだから」<sup>5)</sup> (“I feel like a criminal. I’ve deserted from the army.” “Darling, please be sensible. It’s not deserting from the army. It’s only the Italian army”)

とまた不安な気持になる。こんな気持のまま、フレデリックはキャサリンとボートでスイス領へ渡る。そして2人が静かな生活をはじめると、フレデリックは戦争のことを他人事のように感じる。

戦争は、どこか他の大学のフットボールの試合のように縁遠いものに思われた。しかし、雪が降らないために、いまでも山岳地帯では戦闘がつづいていることを新聞で知っていた<sup>6)</sup>。(The war seemed as far as the football games some one else’s college. But I know from the papers that they were still fighting in the mountains because the snow would not come.)

つい最近まで、自分が従軍していた戦争のことを、フレデリックはあまり感じないようになっていた。このままいけば、あまりにもフレデリックにとって都合のよい生き方である。ヘミングウェイのいつもの手法で、幸せは長くは続かない。キャサリンの死によって物語は終るわけであるが、彼女が帝王切開をうけているあいだに、彼は人間の死を考え、野営のときに燃やした丸太からアリが火のなかに落ちる様子を思い出す。また夕食を食べに行った食堂で、客のひとりが読んでいる新聞の裏側の記事で、イギリス軍の戦線突破を知る。

## (2)

『武器よさらば』は戦場の場面からはじまる。フレデリック・ヘンリーがキャサリン・パークレイと会い、恋をし、愛の逃避行をし、短い幸福な生活を送る場面以外は、戦場の描写であるが、全般的に死の危機感を感じることは少ない。

第一次世界大戦で1917年に戦車が出現するまでは、戦場が設定され、兵士対兵士が闘う戦争であった。現代では民衆が数えきれないほど殺されたり、何代にもわたって後遺症が残るよう

な戦争が世界各地でおこっている。『武器よさらば』では戦場にいる兵士が、休暇をとって旅行をすることができる。フレデリックも戦闘が中止になっている間に、休暇をとって旅行をする。上官も同僚もそれぞれ旅先をすいせんする。アメリカ人であるフレデリックにみんなが好意的な態度で接している。そして、イタリア各地を旅して部隊に戻ると、砲弾にやられた家が何軒かふえたり、病院ができたりしたが、フレデリックには休暇をとる前と同じようにみえた。砲撃は続いているが、単発で部隊はわりとのんびりかまえていた。

山道を車が通れるように工事をしながら、オーストリア軍の動きに注意をはらい、道路が完成したら攻撃を開始するだろう、というゆっくりとした動きであった。戦場の様子と、フレデリックとキャサリンとのつき合いが、同じようにゆっくりと進行していく。第7章でフレデリックは、

イギリス軍にはいってればよかったと思った。そのほうがずっと面倒がなかっただろう。もっとも戦死していたかもしれない。このような傷病兵看護の仕事にはついてないだろうから。いや傷病兵看護の仕事をしていても戦死していたかもしれない。イギリスの救護車の運転兵はときに戦死しているのだから。まあ、ぼくは戦死しないことはわかっていた。この戦争では戦死しない。この戦争はぼくとは何の関係もないのだ。映画のなかの戦争と同じように、ぼくには危険はないように思われた。この戦争が終ることを神に祈った。おそらくこの夏には終るだろう。(I wish that I was with the British. It would have been much simpler. Still I would probably have been killed. Not in this ambulance business. Yes, even in the ambulance business. British ambulance drivers were killed sometimes, Well, I knew I would not be killed. Not in this war. It did not have anything to do with me. It seemed no more dangerous to me myself than war in the movies. I wished to God it was over though. Maybe it would finish this summer.)<sup>7)</sup>

と考えているが、志願した動機も、戦場での自分の義務感もはっきりしたものをもっていない。しかし、ヘミングウェイのいつもの手法で、自分の近い将来の伏線になっている。

キャサリンの恋人はイギリス軍に所属していてすでに戦死している。神に祈ることをしないフレデリックが祈り、彼は戦死しないがキャサリンを失なう。フレデリックが負傷して後送される傷病兵運搬車のなかで、上の担架にいる傷病兵の血がぼたぼた落ちてきて、しばらくしてその兵隊が死ぬ様子(第9章)や、カポレットの総退却(第28章から第30章)など、部隊の動きの描写は見事である。しかし、フレデリックは負傷するが、死んでいった彼の親しい兵士たちはすべて本来の戦闘でやられたのではない。この点について、杉本明氏が次のように指摘している。

戦争は激烈な死が日常的に見られる場所だ。この作品の中でフレデリックの身邊で起った

### 戦争文学としての『武器よさらば』についての一考察

死はキャサリンの死を除いて四種、いずれも戦争を背景としているが、逃亡を企てた軍曹をはじめとして、食事中に砲弾にやられたパシーニ、味方のイタリア兵に殺されたアイモ、同じく味方の憲兵に銃殺された将校など、すべて本来の意味での戦闘で死んだわけではないことは注目すべきである。……ヘミングウェイの関心は戦争でも恋愛でもなく、死そのものであり、人間が生物学的存在としていかに死のワナにとらえられるかなのだ<sup>89</sup>。

戦闘場面での生きるか死ぬかの瀬戸際の描写は、『武器よさらば』ではみられない。また、杉本氏は、「第一次大戦を背景にそれを描いた為に時代の運命を背負わされたが、本来ヘミングウェイ自身は時代を超えた運命の代弁者だと思っていたにちがいない」<sup>90</sup>とも述べている。戦争を背景にした作品でありながら、『武器よさらば』はどうしてもフレデリックとキャサリンの恋を切りはなしては論じることとはできない。戦場で死をのがれたフレデリックには、平穏な生活ができるようになるはずだったのに、キャサリンの死ですべてを失ってしまう。

ここで、アルフレッド・ケイジン氏の『武器よさらば』に対する見方をあげる。

ヘミングウェイは「男らしさ」をためす素晴らしい試煉として、また、文学的想像力をかきたてる刺激として、常に戦争を愛してやまなかった。ヘミングウェイは驚くほど賢明に、また自信をもって、何が作家を強力にし、永続的価値あるものにするかを意識していた。つまり、戦争が作家にとって大きな主題であると知っていたのである。従って、自らの時代にとって可能な経験をあらゆる手段を講じて利用しようと意図したわけである。作家が戦争を描写する際に用いる辛辣さは、戦争の刺激的なおもしろさを打ち消すものではないし、さらに、戦争に固有のきわだった悲劇的感情を否定することにはならない<sup>100</sup>。

そして、ケイジン氏は、ヘミングウェイの戦争について書いたもっともすばらしい場面として、カボレットの敗走の場面と、フレデリックが負傷した場面をあげている。ケイジン氏はその二つの場面のすばらしい描写と文体を、「感情に加えられる衝撃によって避け難い強烈な意識を読者に抱かせる」<sup>111</sup>とほめたたえる。そして「戦争文学が偉大であった時代は、1920年代のヘミングウェイとその世代の作家たちで終結した」<sup>112</sup>と言いきり、「第二次世界大戦の文学は本質的には芸術であるよりも、むしろ記録的なものだ」<sup>113</sup>と言う。作品全体にわたって戦争が描かれているのではなく、部分的な描写のすばらしさをケイジン氏はとりあげているのである。

また、ケイジン氏は、札幌での討論のなかで「戦争文学の質は次第に低下しています。ヘミングウェイのようにロマンティックな心構えで戦争を扱うとすれば、時代遅れで現実に沿わないものとなるからです」<sup>114</sup>といい、「こういうヒーローはかつてはどの時代の戦争文学にも通用するヒーローでした」<sup>115</sup>という。また、ケイジン氏は、

ヘミングウェイの小説では、主人公は信念をもった個人として戦争に参加し、ヒロイズムを信じております。このヒロイズムこそ過去の戦争文学のエッセンスでした。……過去の戦争文学でヒロイズムが大きなテーマとなったのは、ヒロイズムと男らしさが同一視されていたからです。しかし、戦争の有様がすっかり変貌してしまった今、強力な兵器を前にして男らしさとかヒロイズムがなんの役に立つでしょうか<sup>16)</sup>。

と述べている。現代の戦争は、兵器そのものがあまりにも殺人能力が強く、人間のロマンティズムを消しかねない。スティーヴン・クレインの南北戦争を描いた『赤色武功章』(*The Red Badge of Courage*, 1895) の場合も、主人公のヘンリー・フレミングという個人の物語になっている。アメリカ人は、他の国民とちがって、幸運にも自国で他の国と戦争をした経験がない。南北戦争はとくに南部の人に大きな影響をおよぼし、現代にまでその影をひきづっている。しかし、米西戦争、二つの世界大戦、朝鮮戦争、ヴェトナム戦争などアメリカが関係した戦争は、すべてアメリカ合衆国以外の土地でおこなわれている。

ヴェトナム戦争の後遺症は、現在でもアメリカの社会問題のひとつになっているとのことである。ヴェトナムからの帰還兵が、社会復帰できずに、アメリカ北部の山林で単独で生活している数は正確につかめないほどだという。彼らはみな強迫観念にとりつかれていて、何かのはずみで殺人を犯しかねい。そんな自分が恐くなり、人里はなれたところで生活している<sup>17)</sup>。

現代の戦争を題材にした文学も存在しうるはずである。しかし、最近の戦争については、すべてがジャーナリズムによって報道される。戦争体験を小説にしようとしても、どのような形にすれば多くの読者を得られるかはわからない。しかし、報道されるのは直接的な記事であり、フィルムである。人間の内面にまで入りこむことはできない。ケイジン氏の言う「記録的なもの」でない形の作品が産み出されることはまちがいないと思う。現代では、アメリカでは直接参戦していない、兵士の家族たちが兵士同様に戦争の苦しみを味わっているであろう。戦闘場面の写実的な描写ではない描き方の作品が中心になってくるのかもしれない。たとえばカート・ヴォネガットの『第五屠殺場』(*Slaughterhouse—Five*, 1969) のような作品である。

### (3)

『武器よさらば』の良いところばかりをほめたたえる論文が多い。ヘミングウェイの作品だというだけで、無理な偶然の出来事でも、不自然なつながりでも、作者の計算しつくされた技巧ということになってしまう。

「雨」についてもあまりにも計算がすぎる。第1章から雨が降り、コレラが流行して7000人の兵士が死ぬ。そして、キャサリンと別れてフレデリックが前線に行くときに雨が降る。カポレットの総退却のときにも雨が降り、追手をのがれて、2人でスイスへボートで逃げるときも雨、キャサリンが病院でお産で苦しんでいるときも窓の外に雨が降る。最後の部分も、「しばらく

して、ぼくは病室を出て、病院をあとに雨のなかを歩いてホテルに戻った」(After a while I went out and left the hospital and walked back to the hotel in the rain.)<sup>18)</sup>と雨で終わっている。この他にも19章で、フレデリックが入院中にキャサリンと2人でバルコニーに出て、話をしていると雨が降ってきて、キャサリンは雨がこわいという。彼女にとって雨は不吉な予感だったのである。

これだけ都合よく雨が降るのだろうか、という素朴な疑問がわいても不思議はないであろう。『武器よさらば』のなかには、このような現実ではどうかな、という描写がみられ気になるところである。フレデリックがタリアメント川に飛びこんで、しばらくもぐって逃げきり、鉄道に出ると都合よく機関車があえぎ、あえぎ走ってくる。前述した杉本氏は次のように言う。

彼の周辺には本当の悪人はなく、すべて善人でその人達が全て彼に好意を集中する。このことはヘミングウェイ小説に共通することだから驚くに当らぬが、リナルディも牧師も部下も、果てはミラノの病院の門衛からストレーザのホテルのバーテンに至るまで彼の味方だ。しかもこれらの人物は舞台が移動する度に現われては消え、その後の彼らの消息は全くといっていい程つかめず、物語の外へ不要物として除去されてしまう<sup>19)</sup>。

戦場での出来事も、まわりの登場人物も、気候も、フレデリックに都合よく描かれている。また、杉本氏も述べているが、フレデリックは金に不自由したことがないようである。イタリアの戦場にいるときから、スイスに渡っても金銭上の問題はないらしい。『日はまた昇る』のジェイク・バーンズにもこれはあてはまる。ヘミングウェイの作品には、このような現実の生活とかけはなれた描写が、自然にでてくるので何となく読みすごされてしまう。ヘミングウェイ文学の、とくに文体の特徴をほめあげる評論の勢いにおされて、不自然な流れに気づいていながらも、指摘するのがためらわれているのだろうか。それとも、作品全体のバランスからみると、不自然なストーリーの流れは小さなことで、長所がそれを大きく上まわり、良い点ばかりが論じられるのであろうか。

『武器よさらば』が名作であるという評価には異論はない。作品の内容が良いというだけではなく、ヘミングウェイが使うことばは、ことばそのものがひとり歩きをする。「単独講和」(a separate peace)や「生物学的なワナ」(a biological trap)はもとより、『日はまた昇る』ではじめて表に出た「失われた世代」(a lost generation)は文学用語にまでなっている。アメリカ文学の分野にとどまらず、世界の文学界に与えたヘミングウェイの影響ははかり知れないものがある。

それにしても、ヘミングウェイの戦争に対する考え方は、はっきりしない。フレデリック・ヘンリーの個に生きようとする態度が強く出ている。死んだ兵士や負傷した兵士の状況は克服に描かれているが、個性を許さない軍隊ではそれもむなしいだけである。『武器よさらば』は、

『赤色武功章』と同じく今となっては古い形の戦争小説ということになる。

『武器よさらば』を戦争小説としてみてきたが、やはりフレデリック・ヘンリーとキャサリン・パークレイの戦場に咲いた恋を抜きにして語るのには無理がありそうだ。ヘミングウェイの描く恋物語は、型が決まっていてメロドラマ的ではあるが、戦場という背景があるために、この「短い幸福な生活」が読む者を不思議にひきつけるのである。フレデリックは、軍隊からは脱走したが、生きることに執着する。人間は死ぬ運命にあるが、ヘミングウェイ文学の主人公たちはみんな最後まで生に執着する。『日はまた昇る』のジェイク・バーンズを除いたすべての主人公は、ヒーローとして、男として生きるのである。

注

- 1) 『武器よさらば』の構成や文体についてはすでに多くの文献に発表されているが、英潮社新社のペンギン・ブックスの高村勝治氏の注釈書が便利である。
- 2) *A Farewell to Arms*: Scribners, 1969, p. 234.
- 3) *ibid.*, p. 245.
- 4) *ibid.*, p. 245.
- 5) *ibid.*, p. 251.
- 6) *ibid.*, p. 291.
- 7) *ibid.*, p. 37.
- 8) 杉本明「『武器よさらば』に於ける御都合」(『英文学試論』: 英文学試論会, 1980, p. 70) 以下の杉本氏の引用文はこの論文からのものであり、杉本論文と記す。
- 9) *ibid.*, p. 70.
- 10) アルフレッド・ケイジン:「戦争とアメリカ社会——文学の視点から——」(『戦争とアメリカ社会』, 小川晃一・石垣博美編, 木鐸社, 1985, p. 104.  
これは1983年に札幌で開かれた「アメリカ研究札幌クールセミナー」で、政治、経済、文学の3分野の研究者である3名のアメリカ人教授が基調報告を行い、日本人研究者が翻訳したものである。また討論も行われている。ケイジン氏は『武器よさらば』についてくわしく論じ、氏自身がヘミングウェイ文学にとくに愛着をもっているために、『武器よさらば』を高く評価しすぎているように感じられる。ケイジン氏は、*Bright Book of Life, American Novelists and Storytellers from Hemingway to Mailer* (Boston, Little, Brown and Company, 1973) の「戦争小説の衰退」と題した章のなかでも『武器よさらば』をほめたたえている。
- 11) *ibid.*, p. 107.
- 12) *ibid.*, p. 110.
- 13) *ibid.*, p. 110.
- 14) *ibid.*, p. 125.
- 15) *ibid.*, p. 125.
- 16) *ibid.*, p. 125.
- 17) 「さまよえるヒーローたち」と題して、1987年9月12日にNHKで放送された。
- 18) *A Farewell to Arms*, p. 332.
- 19) 杉本論文, p. 68.